

第6章 高等部専攻科

I 結果と考察

1. 回答した教員の属性についての回答

1) 教員の属性

回答した教員の年齢に対する回答では、平均年齢 45.34 歳で、最小値 24 歳、最大値 58 歳であった。また教員歴は、平均値 19.8 年で最小値 2 年、最大値 33 年であった。

表 6-1 に聴覚障害児に対する指導歴、特別支援学校（聴覚障害）での指導歴、特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）での指導経歴、難聴学級ないし通級指導教室での指導歴、通常学級での指導歴の回答の結果を示した。

表 6-1 回答した教員の指導歴 () 内は標準偏差

		全体	無回答	平均値	最小値	最大値
聴覚障害児に対する指導歴	回答数	42	4	14.1	1	30
	%	100	9.5	(11.0)		
特別支援学校（聴覚障害）での指導歴	回答数	42	0	11.52	0	30
	%	100	0	(10.3)		
特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）での指導経歴	回答数	42	0	5.69	0	31
	%	100	0	(7.6)		
難聴学級ないし通級指導教室での指導歴	回答数	42	0	0	0	0
	%	100	0	(0)		
通常学級での指導歴	回答数	266	0	0.76	0	16
	%	100	0	(2.58)		

2) 人工内耳装用児の指導にあたって学習したい研修内容

表 6-2 に学習したい研修内容の記述回答の分類と回答数を示した。

内容は、人工内耳の構造や取り扱い上の注意、人工内耳装用児に対する配慮事項などであった。また手術に関する内容や関連機器に関する情報、補聴器との違いなど医療やリハビリテーション機器に関する研修を希望する回答も見られた。これらは、高等部本科と同様の傾向であった。一方、高等部本科に見られた人工内耳の言語や心理の発達に関する回答はなかった。

表 6-2 学習したい研修内容の分類と回答数

重複の有無	重複あり		重複なし		
	1 年生	2 年生	1 年生	2 年生	3 年生
回答					
管理・周辺機器（ロジャーなど）	0	1	2	1	3
手術方法や手続き、CI の長所・短所、音入れ、HA との違い	1	2	5	1	0
基礎的研修（配慮事項など）	2	2	2	10	2
指導の方法（言語・聴覚活用など）	3	1	6	1	11
特になし	1	0	4	2	3
計	7	6	19	15	19

2. 人工内耳装用児が在籍する学級について

1) 生徒数

表 6-3 に重複ありとなしを合計した高等部専攻科全体及び重複のありなしで分けた場合の回答結果を示した。

表 6-3 生徒数及び人工内耳装用生徒数 () 内は標準偏差

			全体	無回答	平均値	最小値	最大値
高等部専攻科全体	生徒総数	回答数 %	42 100	0 0	4.31 (2.33)	1	9
	うち人工内耳装用生徒数	回答数 %	42 100	30 0	2.21 (1.28)	1	5
重複あり	生徒総数	回答数 %	5 0	0 0	2.20 (2.84)	1	2
	うち人工内耳装用生徒数	回答数 %	5 100	0 0	1.40 (5.55)	1	2
重複なし	生徒総数	回答数 %	37 100	0 0	4.59 (2.33)	1	9
	うち人工内耳装用生徒数	回答数 %	199 100	0 0	2.32 (1.31)	1	5

2) 医療機関との連携の有無

医療機関との連携の有無について、高等部専攻科全体では回答数が 42、無回答は 0 であった。うち、連携ありとの回答は、3 で全体の 7.1%、連携なしとの回答が 39 で全体の 92.9% であった。重複ありでは回答数が 5、無回答は 0 であった。連携ありとの回答は 0 で、連携なしとの回答は 5 で全体の 100% であった。重複なしでは、回答数が 37、無回答は 3 であった。連携ありとの回答は 3 で全体の 8.1%、連携なしとの回答が 34 で全体の 91.99% であった。以上のことから、医療機関と連携している学校は、ほとんどないことがわかった。連携の内容は、学校での聞こえの様子を言語聴覚士に伝えるというものであった。

3. 人工内耳装用児の指導について

1) 補聴器装用児と比べて、指導上、特に課題と感じている点

補聴器装用児と比べて、指導上、特に課題と感じている点に関する記述回答では、重複ありの 1、2 年生合わせて 6 件の回答があり、人工内耳装用児に対して手話を利用しすぎて聴覚活用がうまくできていないこと、人工内耳が磁気を発するために実習に制約が生じたり、衝撃を避けるために行動に制約があったりすること、特になしが 3 件、その他が 1 件であった。重複なしでは、37 件の回答があった。重複なしでは、「特になし」が 11 件、「聴覚的情報が正しく入力されているかの確認の必要性」が 6 件、「人工内耳装用児に聞き違いがあることの指導」が 7 件、「衝撃対策や管理方法」が 9 件、「手話の使用」が 2 件、音量調整が 1 件、「口話によるコミュニケーションをさせるよう指導」が 1 件であった。重複なし群については、高等部本科の重複なし群と類似した結果となった。

2) 補聴器装用の生徒と比べて、指導上工夫している点

補聴器装用児と比べて、指導上工夫している点に関する記述回答では重複ありで、4件の回答があった。内容は、音声を主体とした入力や多様な日本語表現を指導することという、音声の活用と、それによる言語指導に関する記述が2件、特になしが1件、その他が1件であった。重複なしでは、手話、文字などの多様な視覚的手段の利用による伝達内容の確認を多くするという回答が12件と最も多く、次いで、特になしが7件、手話指文字の指導が2件、日本語の助詞の指導が1件、音声をできるだけ使用するという回答が2件であった。その他には、衝撃を避ける工夫をしている、人工内耳装用方向から声をかける、人工内耳の管理活用方法の指導に工夫をしているという回答が2件であった。高等部本科同様に、音声で伝達したことを視覚的手段で確認するという工夫をしている回答が最も多かった。

3) 補聴器装用の生徒と比べて、指導しやすい点

重複ありでは、1年生で3件の回答があり、特になしが1件、音声や音の反応が良いため、ことばの内容が指導しやすいとの回答が1件であった。2年生では、音声での会話が可能であるとする回答が2件であった。重複なしの1年生では、音声や音の気づきが良いとの回答が11件であり、うち、4件では、そのため、手話で伝えきれない内容の指導が可能とのことであった。その他には、特になしという回答が2件であった。2年でも、音の反応の良さと学習上の利点を挙げている回答が7件で、特になしは3件であった。3年生及び学年不明では、実習時の会話で生徒と顔を見合わせなくても、対象に関する説明が可能であること、手話では伝えきれない内容も音声で伝えられることという回答が4件であった。

4. 対象生徒について

1) 年齢

生徒の年齢は、重複ありとなしを合計した専攻科全体では、平均値が19.33歳、最小値18歳、最大値23歳であった。

2) 受診時年齢

受診時の年齢について、重複ありとなしを加えた専攻科全体では、平均値1.13歳、最小値0歳、最大値6歳であった。1歳までに22人(52.4%)、3歳までに26人(62%)の者が受診していた。ただし、高等部同様に無回答の割合が、35.7%と高く、生徒の受診年齢を専攻科教員が把握していない可能性が示唆される。

重複ありの1年生では、3名の回答があり、1歳未満1名、1歳1名、無回答1名であった。2年生では1歳未満が1名、無回答が1名であった。重複なしの1年生は1歳未満が5人(29.4%)、1歳が3人(17.6%)、2歳1名(5.9%)、3歳2名(11.9%)、無回答6名(35.3%)であった。2年生では、重複なしの2年生は1歳未満が4人(25.0%)、1歳が6人(37.5%)、2歳1名(6.3%)、5-9歳1名(6.3%)、無回答4名(25.0%)であった。3年生では、無回答2名(100%)であった。

以上のことから、対象時の受診年齢は、重複のありなしともに1歳までの回答が多いことがわ

かり、この傾向は高等部本科と同様であった。

3) 人工内耳の装用状態

対象生徒の人工内耳装用状態について、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では右耳装用が 29 人 (69%)、左耳が 11 人 (26.2%)、両耳装用が 2 (4.8%) であった。重複あり 1 年生では、右耳が 2 人 (66.7%)、左耳が 1 人 (33.3%) であった。2 年生では右耳が 2 人 (100%)、重複なしの 1 年生では、右耳が 11 人 (64.7%)、左耳が 5 人 (29.4%)、両耳装用が 1 人 (5.9%) であった。2 年生では、右耳が 12 人 (75%)、左耳が 3 人 (18.8%)、両耳装用が 1 人 (6.3%) であった。3 年生は、左耳が 2 人 (100%) であった。

また「片耳装用の場合、もう一方の耳への補聴器装用の有無」については、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では、有りが 17 人 (40.5%)、無しが 23 人 (54.8%) であった。重複ありの 1 年生では、有りが 2 人 (66.7%)、無しが 1 人 (33.3%) であった。2 年生は、有り 1 名 (50%)、無し 1 名 (50%) であった。重複なし 1 年生では、有りが 7 人 (41.2%)、無しが 9 人 (52.9%)、2 年生で有りが 6 人 (37.5%)、無しが 9 人 (56.3%)、無回答が 1 人 (6.3%) であった。3 年生は、有りが 2 人 (100%) であった。

「学校での補聴援助システム使用の有無」の問いに対しては、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では、有りが 7 人 (16.7%)、無しが 34 人 (81%) であった。重複のありの 1 年生では、無しが 3 人で 100%、2 年生で無し 2 人で 100% であった。重複なしでは、1 年で有りが 1 人の 5.9%、無しが 16 人の 94.1%、2 年生では有りが 4 人の 25%、無しが 11 人の 68.8%、無回答が 1 人の 6.3% であった。3 年生では、有りが 2 人の 100% であった。

以上のことから人工内耳の装用状態については、片耳装用が多かった。また人工内耳の反対側に補聴器を装用している者の割合が多かった。補聴援助システムの使用があるとの回答数が少なかった。

4) 人工内耳装用開始時期

人工内耳装用開始時期について重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では、平均値 5.48 歳、最小値 0 歳、最大値 18 歳であった。1 歳までに装用した者はなく、2 歳で 10 人 (23.8%)、3 歳で 9 人 (21.4%)、4 歳 4 人 (9.5%)、5-9 歳 5 人 (11.9%)、10 歳以上 5 人 (11.9%)、無回答 9 人 (21.4%) であった。無回答の割合が、他の問いと比較して高く、専攻科の生徒の人工内耳開始年齢について、受診の年齢同様に専攻科教員が把握していないことが示唆される。

表 6-4 に重複ありと重複なしの人工内耳の装用開始年齢の数と割合を示した。学年や重複ありなしでの明らかな傾向が認められなかった。

表 6-4 人工内耳装用開始時期 ()内は%

重複の有無	重複あり 平均値 6.81 歳、最小値 32 歳、最大値 17 歳		重複なし 平均値 5.3 歳、最小値 2 歳、最大値 18 歳		
	1 年生	2 年生	1 年生	2 年生	3 年生
年齢					
学年					
1 歳未満	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0(0)	0(0)
1 歳	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0(0)	0(0)
2 歳	0 (0)	0 (0)	3 (17.6)	6(37.5)	0(0)
3 歳	1 (33.3)	1 (50)	6 (35.3)	1(6.3)	0 (0)
4 歳	1 (33.3)	0 (0)	0 (0)	2(12.5)	1 (50)
5-9 歳	0 (0)	0 (0)	2 (11.8)	3(18.8)	0 (0)
10 歳以上	1 (33.3)	0 (0)	2 (11.8)	0(0)	1 (50)
無回答	0 (0)	1 (50)	4 (23.5)	4(25)	0(0)
計	3	2	17	16	2

5) 手術前の平均聴力レベル

手術前の平均聴力レベルは、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では、右耳 114dB で標準偏差は 8.61、最小値が 100dB、最大値が 126dB であった。左耳 97dB、標準偏差は 29.4、最小値が 23dB、最大値が 122dB であった。

表 6-5 に学年別に重複ありなしに分類した結果を示した。重複のありなしにかかわらず、ほとんどの学年いずれも 100dB 周辺の聴力であった。

なお、手術前の平均聴力レベルの回答の値の中には、正確に測定されなかったか、記入を誤ったか、いずれかによると思われるものが見られた。

表 6-5 手術前の平均聴力レベル ()内は、標準偏差

重複の有無	重複あり				重複なし					
	1 年生 (回答 1 名)		2 年生 (回答無)		1 年生 (回答 6)		2 年生 (回答 右 2 左 1)		3 年生 (回答無)	
学年	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
耳の左右										
平均聴力レベル	120 (0)	90 (0)			113 (10.5)	108 (8.1)	114 (1.4)	112 (0)		
最小値	120	90			100	100	81	112		
最大値	120	90			126	122	134	112		

6) 現在の平均聴力レベル

現在の平均聴力レベルは、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では、右耳 54dB で標準偏差は 37.6、最小値が 13dB、最大値が 120dB 左耳は、47dB、標準偏差は 31.3、最小値が 20dB、最大値が 117dB であった。表 6-6 に学年別に重複ありなしに分類した結果を示した。いずれも回答数が少なく、重複ありとなしの違いや学年による傾向を読み取ることはできない。

表 6-6 人工内耳又は補聴器装用下での平均聴力レベル ()内は、標準偏差

重複の有無	重複あり				重複なし					
学年	1年生 (回答 2)		2年生 (回答右2、左1)		1年生 (回答10)		2年生 (回答7)		3年生 (回答0)	
耳の左右	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
平均聴力 レベル	72 (53)	78 (42.3)	36 (7.1)	75 (0)	51 (37.6)	40 (30)	70 (41.2)	46 (33.7)		
最小値	35	46	31	75	20	20	19	22		
最大値	110	110	41	75	117	117	120	100		

人工内耳または補聴器を装用していない耳の平均聴力レベルは、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では、平均値が 107dB、標準偏差 10.4、最小値 84、最大値 127 であった。重複ありの 1 年生では回答がなかった。2 年生では回答が 2 件あり、平均値が 95 dB、標準偏差が 1.4、最小値が 94 dB、最大値が 95 dB であった。重複なしの 1 年生では、9 件の解答があり、平均値は 109 dB、標準偏差が 11.4、最小値 97、最大値 127 であった。2 年生では、解答が 7 件あり、平均値が 111 dB、標準偏差 5.4、最小値 100、最大値 115 であった。3 年生は回答数が 1 件であり 29 dB であった。

表 6-7 重複する障害種とその数及び割合 ()内は%

障害種	学年	1 年生 (回答数 3)	2 年生 (回答数 2)
視覚障害		1(33.3)	0(0)
知的障害		0(0)	2(100)
肢体不自由		1(33.3)	0(0)
病弱・身体虚弱		0(0)	0(0)
その他		2(66.7)	0(0)
無回答		0(0)	0(0)

7) 重複障害の有無

重複障害の有無については、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では有りが 5 件で、11.9% (回答数 42)、無しが 37 件で 88.1% であった。この割合は概ね高等部本科と同様であった。表 6-7 に重複する障害の種別の数と割合を学年別に示した。いずれの学年の解答数が少なく、傾向を読み取ることはできない。

8) 普段使用するコミュニケーションモード (複数回答可)

生徒が普段使用するコミュニケーションモードについては、重複ありと重複なしを合計した高等部専攻科全体では、42 の回答があった。図 6-1 には、コミュニケーションモードの種類と割合を示した。その結果、手話、音声、指文字を中心として、読話やキューサイン、筆談も利用されていることがわかった。この傾向は、高等部本科と同様であった。

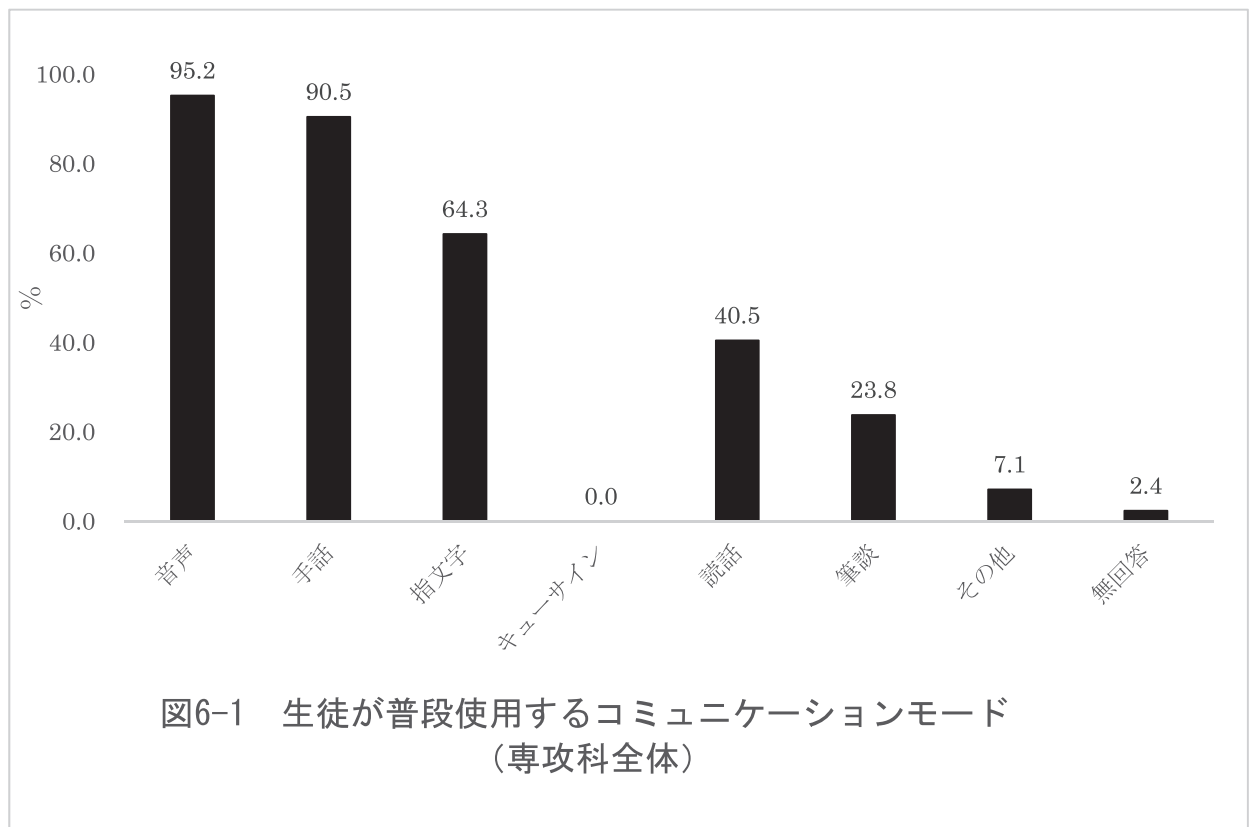


図6-1 生徒が普段使用するコミュニケーションモード (専攻科全体)

表 6-8 生徒が普段使用するコミュニケーションモード () 内は%

モード	重複の有無		重複あり			重複なし		
	学年	1年生	2年生	1年生	2年生	3年生		
音声		3(100)	2(100)	16(94.1)	16(100)	2(100)		
手話		3(100)	2(100)	15(88.2)	15(93.8)	2(100)		
指文字		3(100)	0(0)	14(82.4)	7(43.8)	2(100)		
キューサイン		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)		
読話		2(66.7)	0(0)	10(58.8)	4(25)	0(0)		
筆談		2(66.7)	0(0)	5(29.4)	3(18.8)	0(0)		
その他		1(33.3)	0(0)	0(0)	0(0)	2(100)		
無回答		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)		
回答数		3	2	17	16	2		

表 6-8 に学年別に重複ありなしの結果を示した。両者のいずれの学年でも手話と指文字の使用率が高い。その他の使用割合については、学年による違いが大きく、一定の傾向を見いだせなかった。

9) 上記のコミュニケーションモードの中で、学校での学習時に用いるもの

図 6-2 に重複ありと重複なしを合計した専攻科全体における各コミュニケーションモードの割合を示した。回答数は、42 であった。主として音声と手話が使用され、普段使用するコミュニケーションモードよりは、この 2 者の割合が高かった。このことは、高等部本科と同様であった。

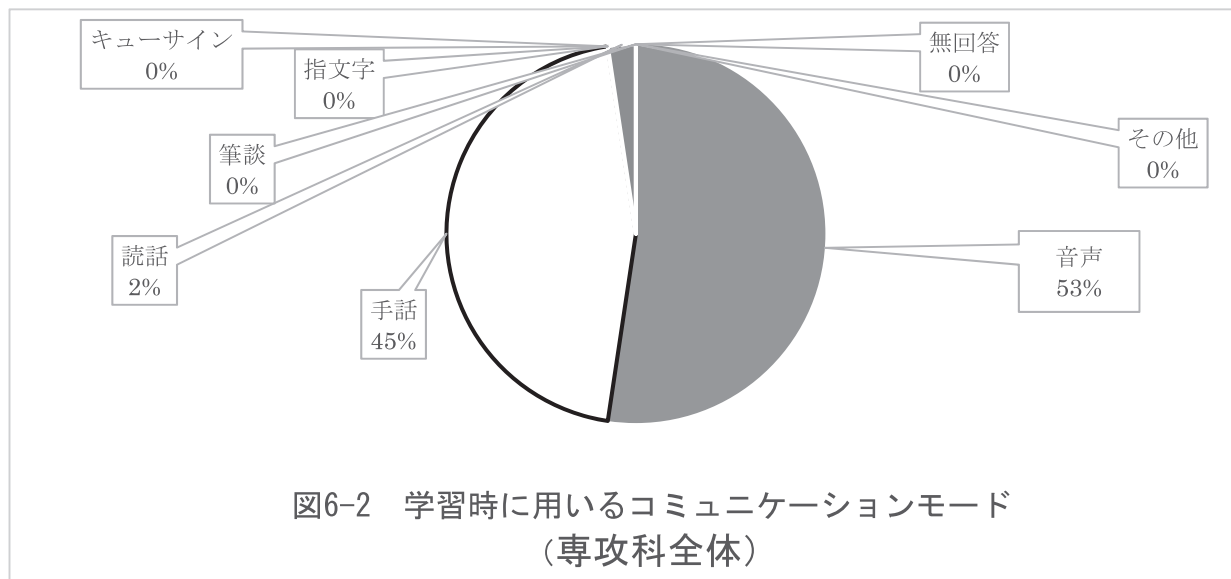


表 6-9 学習時に使用するコミュニケーションモードの第1番目 ()内は%

モード \ 学年	重複あり		重複なし		
	1年生	2年生	1年生	2年生	3年生
音声	1(33.3)	0(0)	8(47.1)	9(56.3)	2(100)
手話	2(66.7)	2(100)	8(47.1)	7(43.8)	0(0)
指文字	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
キューサイン	0(0)	0(0)	1(5.9)	0(0)	0(0)
読話	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
筆談	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
その他	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
無回答	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
回答数	3	2	17	16	2

表 6-10 学習時に使用するコミュニケーションモードの第2番目 ()内は%

モード \ 学年	重複あり		重複なし		
	1年生	2年生	1年生	2年生	3年生
音声	1(33.3)	2(100)	8(47.1)	3(18.8)	0(0)
手話	1(33.3)	0(0)	7(41.2)	8(50)	2(100)
指文字	0(0)	0(0)	1(5.9)	3(18.8)	0(0)
キューサイン	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
読話	1(33.3)	0(0)	1(5.9)	0(0)	0(0)
筆談	0(0)	0(0)	0(0)	2(12.5)	0(0)
その他	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
無回答	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
回答数	3	2	17	16	2

表 6-9 に学習時に使用するコミュニケーションモードの中で、第1番目として挙げられたモードの数と割合を学年別に重複ありと重複なしに分けて示し、表 6-10 には第2番目として挙げられたモードの数と割合を示した。音声と手話が主に用いられていることは、専攻科全体の傾向と同じであった。その他に特に顕著な傾向は見られなかった。

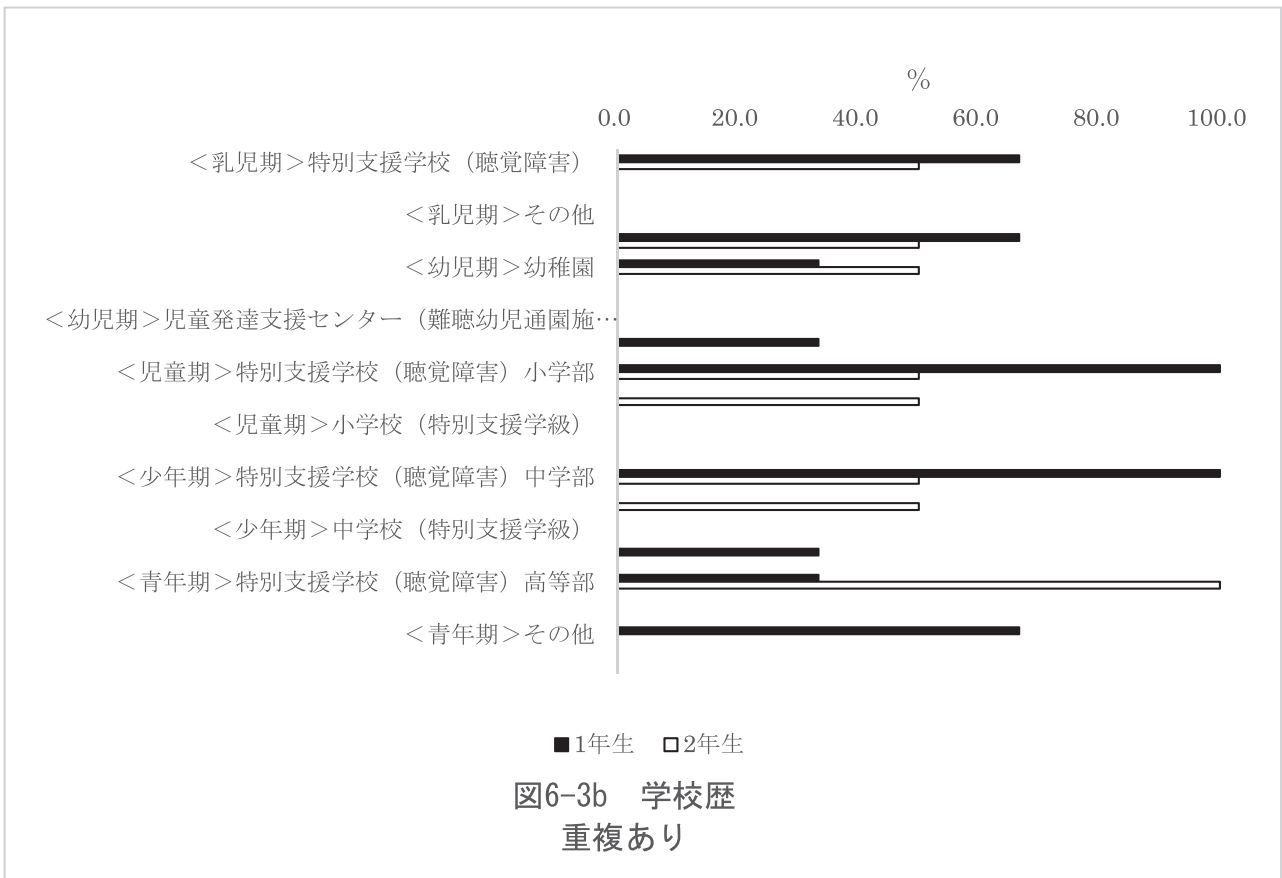
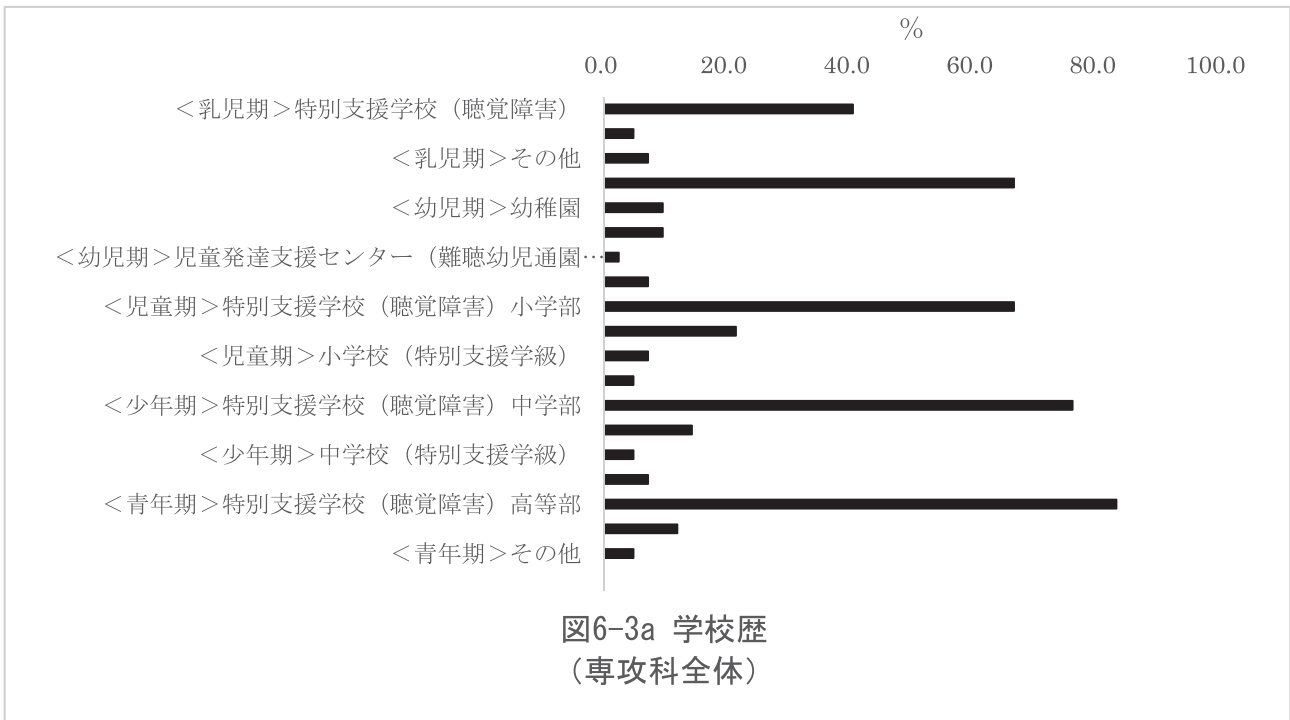
10) 家族構成について（きょうだい、聴覚障害者の近親者の有無）

家族構成について、きょうだいが有りとは回答したのは、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体で、全回答数 42 件のうち 32 件が、有りとは回答し、これは全体の 83.3%であった。また重複ありの 1 年生では、回答数 3 のうち、有りが 2 件 (66.7%)、2 年生では 2 件 (100%) であった。重複なしでは、1 年生は回答 17 のうち有りが 15 (88.2%)、2 年生では回答数 16 件のうち 13 (81.3%)、3 年生では 2 (100%) であった。家族構成の「きょうだい」については、学年、重複のあり、なしにかかわらず、きょうだいがいるという回答が多く、これは高等部本科の傾向と同様であった。

重複ありと重複なしを合計した高等部専攻科全体で近親者に聴覚障害者が有りとは回答したのは、全回答数 42 件のうち 4 件で、9.5%であった。また重複ありの 1 年生では、0% (回答数 3)、2 年生も 0% (回答数 2) であった。重複なしでは、1 年生は 0% (回答数 17)、2 年生では 2 件 (12.5%)、3 年生では 100% (回答数 2) であった。家族構成の「聴覚障害者の近親者」については、学年のばらつきがやや見られたが、概ね重複のありと重複なしにかかわらず、有りという回答が少なかった。

11) 学校歴

学校歴を、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体の 42 件の回答を学校歴で分類した結果を図 6-3a に示した。重複ありの 1 年生 3 件、2 年生 2 件の回答は図 6-3b に、重複なしの 1 年生 17 件、2 年生 16 件、3 年生 2 件の回答は図 6-3c に示した。全体的傾向は、重複あり重複障害なしともに聴覚特別支援学校への在籍率が高い。「その他」については、乳幼児期に 1 件、重複ありで福祉施設の回答があり、児童期では、重複なしに小学校が 2 件、少年期では、重複ありで、特別支援学校の肢体不自由との回答が 1 件、重複なしで中学校が 2 件、青年期では、重複ありで、特別支援学校の聴覚障害と特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科が、それぞれ 1 件であった。



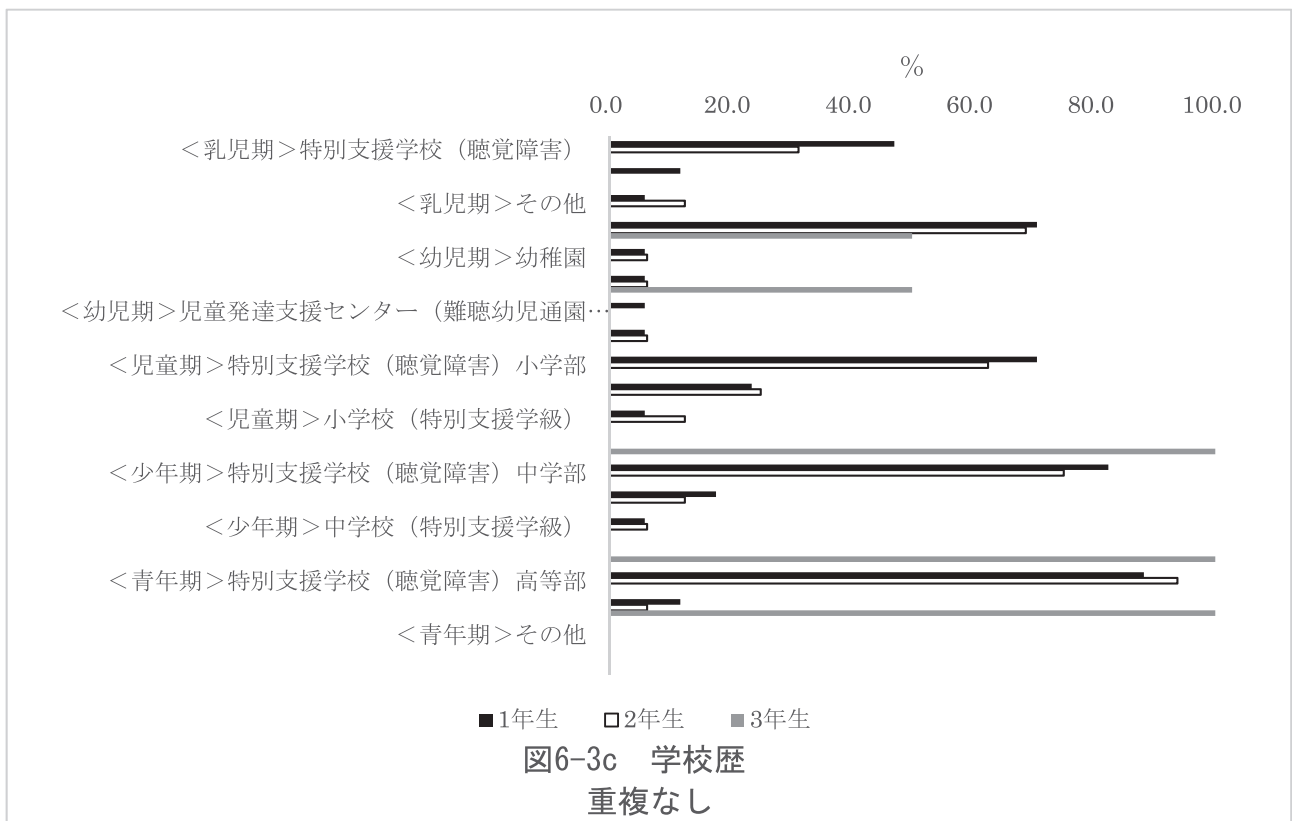


表 6-11 今後の進路の分類と回答数及び割合

重複の有無		重複あり		重複なし		
		1年生	2年生	1年生	2年生	3年生
就職・	就職	2(66.7)	1(50)	17(100)	13(81.3)	1(100)
その他	職業能力開発校	0(0)	1(50)	0(0)	0(0)	0(0)
	その他	1(33.1)	0(0)	0(0)	1(6.3)	1(100)
大学等	特別支援学校(聴覚障害)専攻科	1(33.1)	2(0)	1(5.7)	0(0)	0(0)
	高等専門学校	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	筑波技術大学	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	一般大学	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	その他	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	無回答	0(0)	0(0)	0(0)	1(6.3)	0(0)

12) 今後の進路

今後の進路について、重複ありと重複なしを合計した専攻科全体では、42件の回答中、就職が36ともっと多く、全体の86.7%であった。進学は、特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科が1件で2.45%、その他では、専門学校が1件で2.4%であった。進学の合計は、約半数であった。

表 6-11 に、重複ありと重複なしの結果を示した。重複ありと重複なしともに、いずれの学年でも就職がもっとも多かった。重複ありの「その他」は、未定であった。重複ありの進学希望先は、特別支援学校（聴覚障害）専攻科のみであった。

以上のことから、専攻科の今後の進路については、重複ありも重複なしも、ほとんどの者が就職を希望していることがわかった。この傾向は、多様な進学先も視野に入れた進路希望がみられた高等部本科の結果とは、異なるものであった。

なお、重複ありと重複なしともに、「特別支援学校小学部」など、義務教育段階の学校を「今後の進路」として回答している例が見られたが、これは分析の対象としなかった。

13) 聴覚活用の状態について

①音への気づき

「音への気づき」は、「極めて良い」と「良い」を合わせると、「重複なし」73.0%、「重複あり」20.0%（「極めて良い」0.0%）であり、「重複なし」では良好な者が過半数である。また「重複あり」では良好とはいえない結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

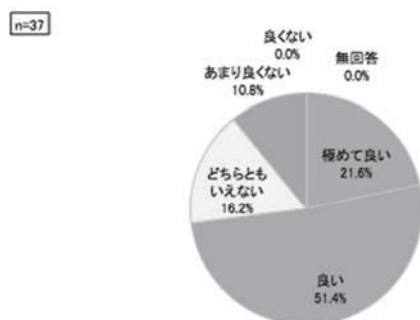


図 6-4a 音への気づき（重複なし）

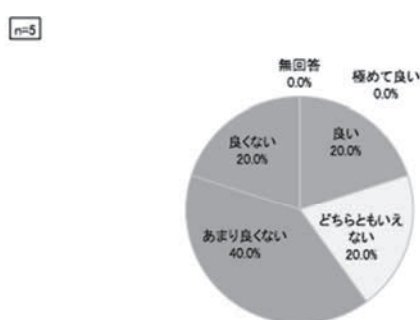


図 6-4b 音への気づき（重複あり）

② 言語音の聞き取り

「言語音の聞き取り」は、「極めて良い」と「良い」を合わせると、「重複なし」62.2%、「重複あり」20.0%（「極めて良い」0.0%）であり、「重複なし」では良好な者が過半数であったが「重複あり」では良好な者は少ないという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

n=37

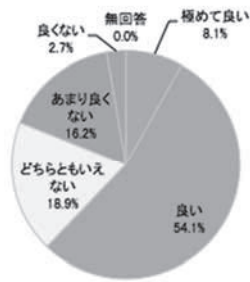


図 6-5a 言语音の聞き取り（重複なし）

n=5

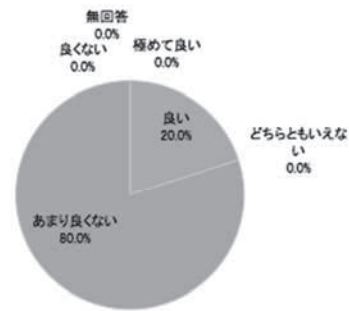


図 6-5b 言语音の聞き取り（重複あり）

③ 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子

「教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子」は、「よくできている」と「できている」を合わせると「重複なし」62.1%、「重複あり」20.0%（「極めて良い」0.0%）であり、「重複なし」では良好な者が過半数であったが「重複あり」では良好な者は少ないという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

n=37

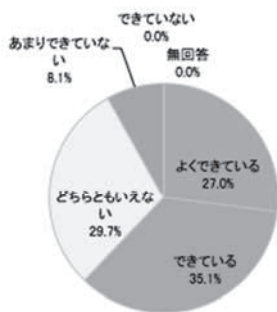


図 6-6a 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子（重複なし）

n=5

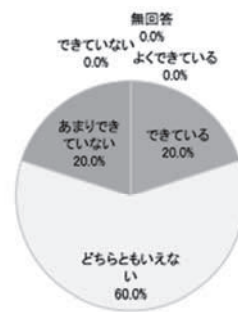


図 6-6b 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子（重複あり）

④ 聴覚活用に関する指導の現状と課題<記述>

主なカテゴリーとしては、「人工内耳の管理」「聴覚活用」「手話」「日本語」「傾聴態度&行動面」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

20 件の記述があった。

「聴覚活用」について「良好」11 件、「課題あり」4 件であった。「手話の活用」について「良好」2 件、「課題あり」2 件であった。「日本語獲得」は「良好」2 件、「課題あり」2 件であった。

「傾聴態度&行動」について「良好」3 件であった。

「重複なし」は「聴覚活用」について良好と思われる。

・「重複あり」

3件の記述があった。

「聴覚活用」について「良好」1件、「課題有あり」1件であった。「手話の活用」は2件であった。

14) 言語活動（読み書き）

① 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力

「同年齢の健聴の幼児生徒の平均値と比べた文法力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」67.5%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

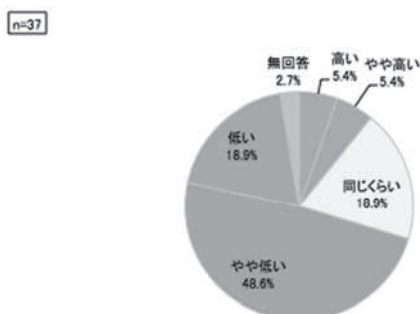


図 6-7a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力（重複なし）

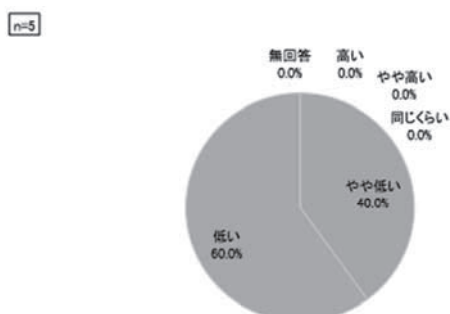


図 6-7b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力（重複あり）

② 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章理解力

「同年齢の健聴の幼児生徒の平均値と比べた文章理解力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」59.4%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

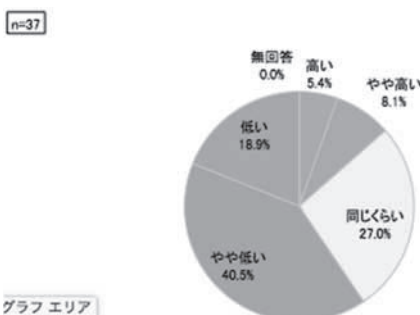


図 6-8a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文書理解力（重複なし）

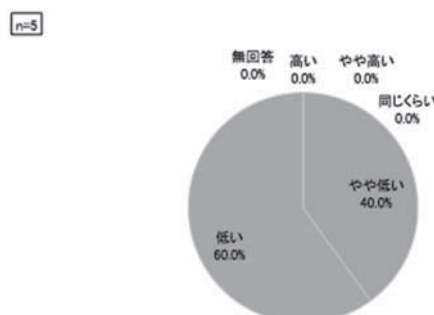


図 6-8b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文書理解力（重複あり）

③同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を書く力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を書く力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」48.6%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

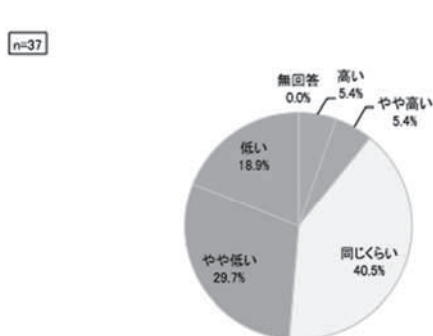


図 6-9a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を作る力（重複なし）

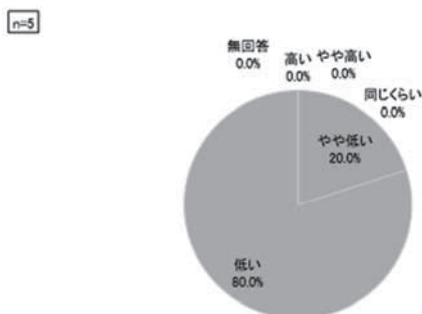


図 6-9b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を作る力（重複あり）

④同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」64.8%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

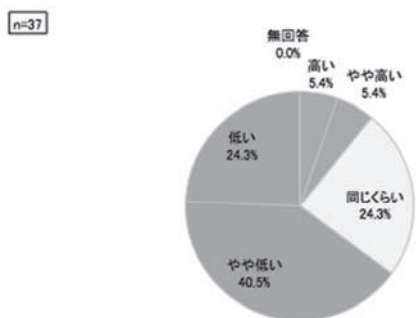


図 6-10a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力（重複なし）

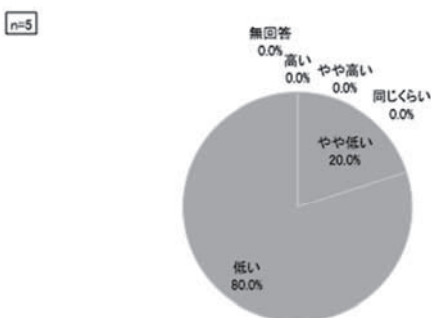


図 6-10b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力（重複あり）

⑤言語活動に関する指導の現状と課題<記述>

主なカテゴリーとしては、「聞く」「話す」「読む」「書く」「語彙」「助詞等」「文法・敬語」「学年相当」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

13件の記述があった。

「聞く」については「良好」1件、「課題あり」2件であった。「話す」については「良好」3件、「課題あり」3件であった。「読む」については「課題あり」4件であった。「書く」については「課題あり」15件であった。「語彙」については「課題あり」3件であった。「助詞等」については「課題あり」3件であった。「文法および敬語」については「課題あり」4件であった。「学年相当学力」については「課題あり」2件であった。

「重複なし」の「書く」については課題が多いといえる。

・「重複あり」

4件の記述があった。

「聞く」については「良好」1件であった。「話す」については「良好」1件であった。「読む」については「課題あり」3件であった。「書く」については「課題あり」3件であった。「語彙」については「課題あり」3件であった。「学年相当学力」については「課題あり」2件であった。

5. 対象幼児生徒の学校での学習と生活について

1) 学業成績

① 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績」は、「低い」と「少し低い」を合わせると「重複なし」68.5%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

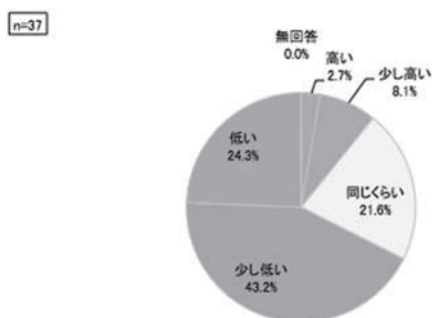


図 6-11a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績（重複なし）

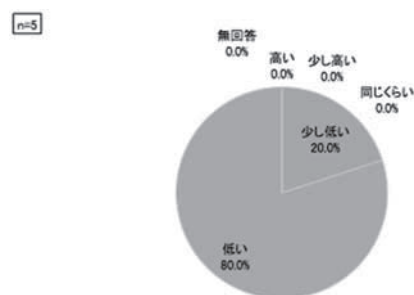


図 6-11b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績（重複あり）

② 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績

「潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績」は、「比較できないほど低い」と「かなり低い」と「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」73.0%、「重複あり」80.0%であり、どちらも低い者が過半数であった。

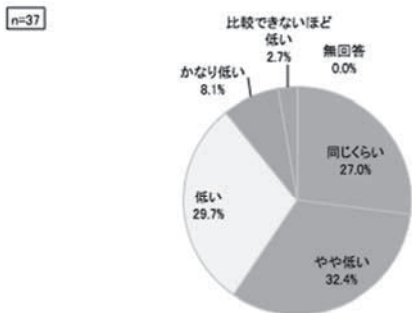


図 6-12a 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績（重複なし）

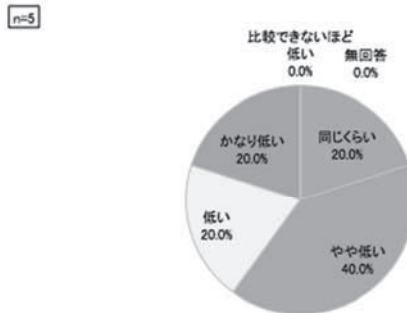


図 6-12b 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績（重複あり）

③ 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力」は、「低い」と「少し低い」を合わせると「重複なし」59.4%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

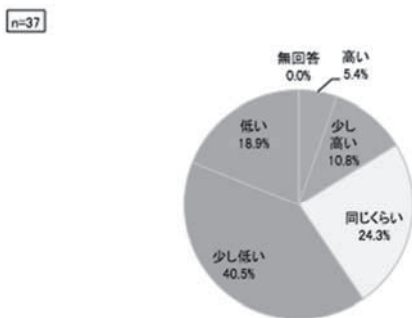


図 6-13a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力（重複なし）

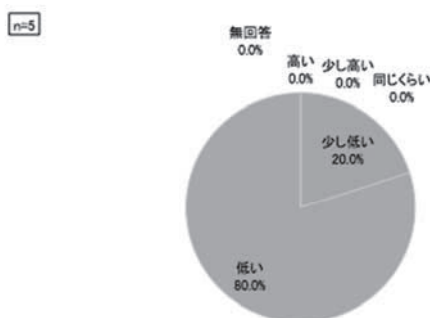


図 6-13b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力（重複あり）

④ 学業成績の現状と課題<記述>

主なカテゴリーとしては、課題として「重複障害」「日本語・学力」「論理・抽象・思考」「学習態度・習慣」「反復学習・定着」「能力対応」「論理・抽象・思考」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「反復学習・定着」「能力に応じた指導」「個別指導」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

20 件の記述があった。

課題として「日本語・学力」16 件、「学習態度・習慣」1 件があげられ、

指導上工夫していることとして「能力に応じた指導」1 件、「個別指導」1 件の回答内容であった。

「重複なし」における「日本語・学力」は重要課題である。

・「重複あり」

4 件の課題に関する記述があった。

課題として、「重複障害」1件、「日本語・学力」2件、「論理・抽象・思考」1件があげられ、指導上工夫していることとして、「反復学習・定着」1件、「能力に応じた指導」2件、「個別指導」1件の回答内容であった。

2) 学習態度

①同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度

「同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度」は、「重複なし」では「ほとんどない」32.4%、と「同じくらい」43.2%の2峰性となっているのに対し、「重複あり」では「少し多い」40%が最も多いものの「同じくらい」20%、「少しある」20%、「ほとんどない」20%という結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。両者とも、健聴生徒と比べて特に多いというわけではなかった。

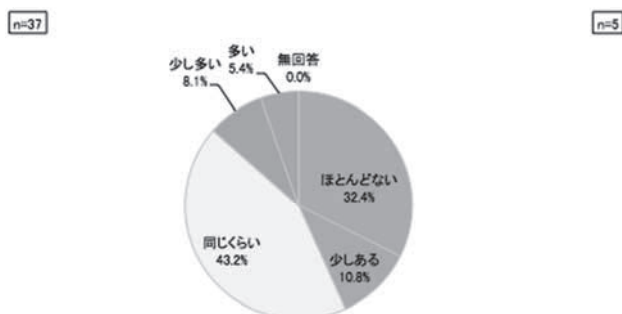


図 6-14a 同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度（重複なし）

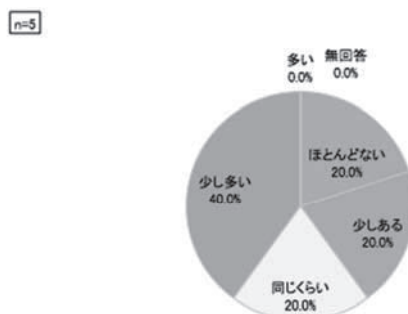


図 6-14b 同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度（重複あり）

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間」は、「重複なし」では「同じくらい」54.1%で最も多く、両側はほぼ対称となっているのに対し、「重複あり」では「短い」と「少し短い」を合わせると80.0%であり、「重複あり」では注意持続時間の短い者が健聴の生徒に比べて多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

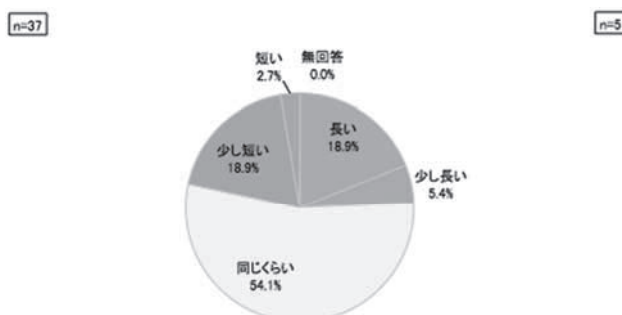


図 6-15a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間（重複なし）

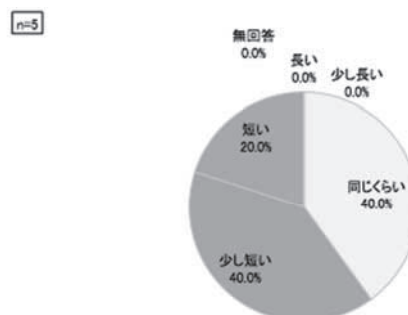


図 6-15b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間（重複あり）

③口頭による指示に対する戸惑いや躊躇

「口頭による指示に対する戸惑いや躊躇」は、「重複なし」では「時々ある（他の子と同じくらい）」45.9%で最も多くなっており、両側はほぼ対称であるのに対し、「重複あり」では「多い」と「やや多い」を合わせると80.0%であり、「重複あり」では口頭の指示に対する戸惑いや躊躇のある者が健聴の生徒に比べて多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りがある可能性がある）。

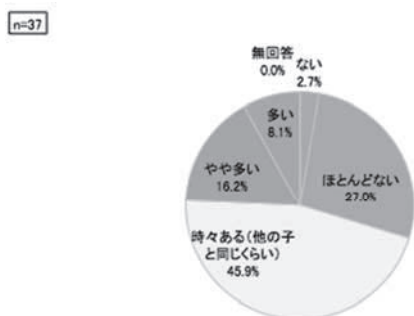


図 6-16a 口頭による指示に対する戸惑いや躊躇（重複なし）

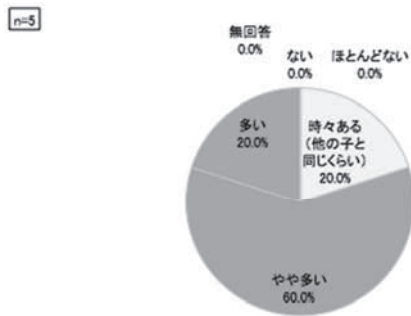


図 6-16b 口頭による指示に対する戸惑いや躊躇（重複あり）

④学習態度に対する指導の現状と課題<記述>

本記述回答は、5件のみであるので、記述内容を要約したもののみ以下に記載する。課題としては、「集中力」「見通し」「発達障害」、指導上の工夫としては「手話の併用」である。

3) コミュニケーション能力

①同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると48.6%で半数弱であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると100.0%であり、「重複あり」ではコミュニケーション能力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りがある可能性がある）。

n=37

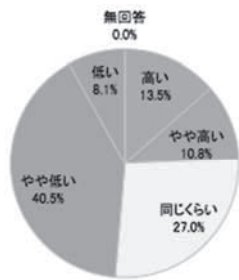


図 6-17a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力（重複なし）

n=5

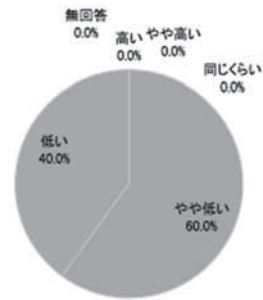


図 6-17b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力（重複あり）

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた語彙力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると 62.1%であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると 100.0%であり、「重複あり」では語彙力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

n=37

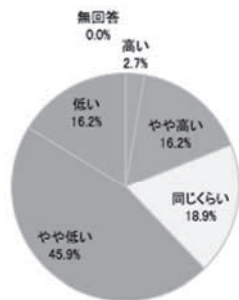


図 6-18a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた語彙力（重複なし）

n=5

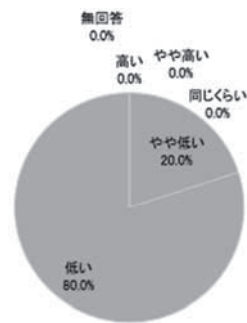


図 6-18b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた語彙力（重複あり）

③同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた出来事を話す能力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた出来事を話す能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると 40.8%であり「高い」と「やや高い」を合わせた 18.9%に比べて多いのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると 100.0%であり、「重複あり」では出来事を話す能力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

n=37

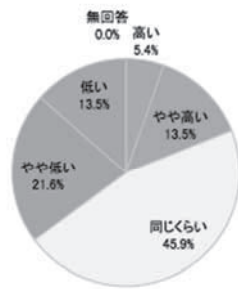


図 6-19a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べて出来事を話す能力（重複なし）

n=5

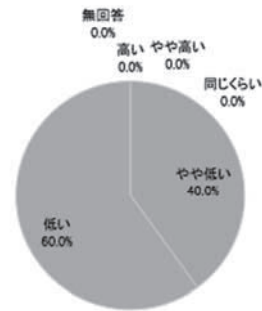


図 6-19b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べて出来事を話す能力（重複あり）

④コミュニケーションにおける指導の現状と課題 <記述>

主なカテゴリーとしては、課題として「発達障害等」「メタ認知等」「日本語・語彙」「思考・論理」「対人関係」「コミュニケーション経験」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「コミュニケーション指導」などの回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

・「重複なし」

21 件の記述があった。

課題として「発達障害等」1 件、「メタ認知等」1 件、「日本語・語彙」9 件、「思考・論理」2 件、「対人関係」1 件、「コミュニケーション経験」3 件、であった。指導上工夫していることとして「コミュニケーション指導」7 件であった。

以上についてまとめると、「重複なし」において「日本語・語彙」が重要な課題であり、指導上「コミュニケーション指導」が必要といえる。

・「重複あり」

4 件の記述があった。

課題として「日本語・語彙」3 件であった。指導上工夫していることとして「コミュニケーション指導」1 件であった。

4) 学校生活

①教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況

「教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況」は、「重複なし」において「多い」と「やや多い」を合わせると 37.8%であり、「少ない」と「やや少ない」を合わせた 24.3%に比べて多い。「重複あり」では、「多い」0%、「やや多い」は 20%であり、「少ない」と「やや少ない」を合わせた 60%に比べて少ない（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りがある可能性がある）。「重複なし」は、「教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況」は比較的良いといえる。

n=37

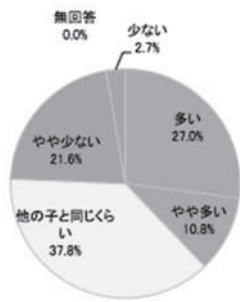


図 6-20a 教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況（重複なし）

n=5

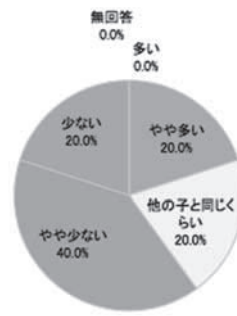


図 6-20b 教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況（重複あり）

②持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況

「持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況」は、「重複なし」では「常に持参・提出」と「ほとんど持参・提出」を合わせると 54.0%であるのに対し、「重複あり」では「常に持参・提出」0%、「ほとんど持参・提出」60.0%であり、両者とも良好といえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

n=37

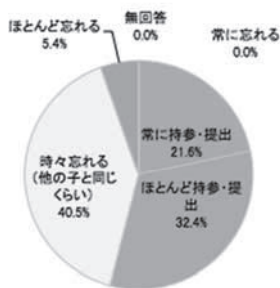


図 6-21a 持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況（重複なし）

n=5

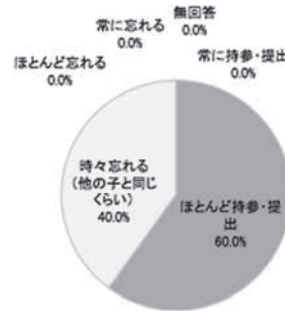


図 6-21b 持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況（重複あり）

③教師の指示の後、課題を遂行することの困難

「教師の指示の後、課題を遂行することの困難」は、「重複なし」では「ない」と「ほとんどない」を合わせると 51.3%、「重複あり」では「ほとんどない」60.0%で両者とも過半数であり、良好といえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

n=37

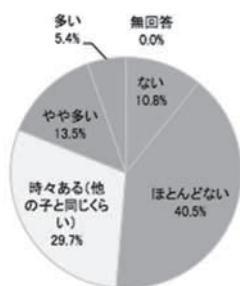


図 6-22a 教師の指示の後、課題を遂行することの困難（重複なし）

n=5

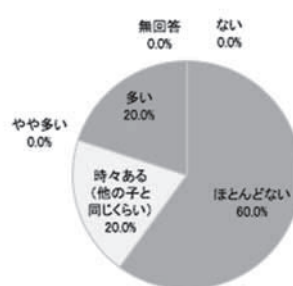


図 6-22b 教師の指示の後、課題を遂行することの困難（重複あり）

④生活指導の現状と課題<記述>

本記述回答は、5件のみであるので、記述内容を要約したもののみ以下に記載する。

課題としては、「学習・生活態度」「理解の確認」

5) 学校での行動

①同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた、学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動」は、「ない」と「ほとんどない」を合わせると「重複なし」72.9%「重複あり」60%で過半数を超えており良好といえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

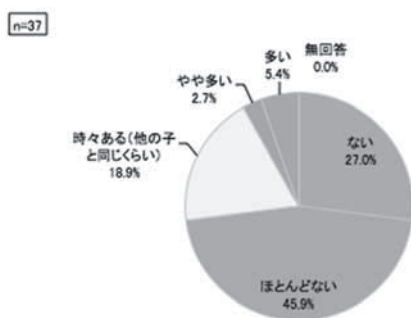


図 6-23a 学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動（重複なし）

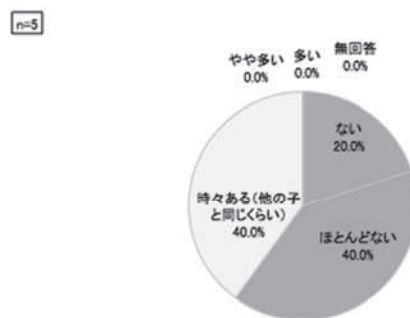


図 6-23b 学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動（重複あり）

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること」は、「ない」と「ほとんどない」を合わせると「重複なし」64.9%、「重複あり」40.0%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

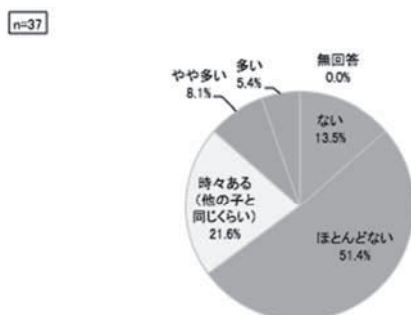


図 6-24a 早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること（重複なし）

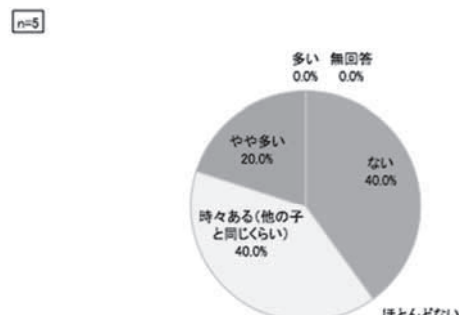


図 6-24b 早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること（重複あり）

③他の子どもたちとの良好な関係の維持

「他の子どもたちとの良好な関係の維持」は、「良好ではない」と「あまり良好ではない」を合わせると「重複なし」10.8%「重複あり」20%であり、両者とも良好ではない者は少ないといえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）。

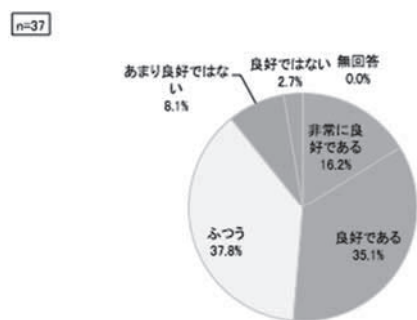


図 6-25a 他の子どもたちとの良好な関係の維持（重複なし）

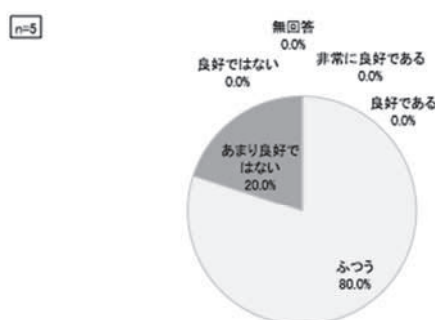


図 6-25b 他の子どもたちとの良好な関係の維持（重複あり）

④行動に対する指導の現状と課題<記述>

本記述回答は、5件のみであるので、記述内容を要約したもののみ以下に記載する。

課題としては、「メタ認知」「情緒・心理」「対人関係」「常識」、指導上の工夫としては、「対話による理解」である。

II まとめ

専攻科の調査結果について以下にまとめる。

・専攻科における「重複あり」の対象者は少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性があるが、「重複あり」は「重複なし」に比べて課題は多い可能性がある。

・高等部本科生徒と同様、補聴器装用生徒と比較して人工内耳装用生徒は言語やコミュニケーションにおいて、そのメリットが大きい生徒もいるが、メリットがあまりない生徒もあり、かなりバリエーションがあるようである。人工内耳装用生徒については、そのような個人差の大きさをふまえ、その実態に応じた配慮が重要である。特に「重複あり」においては、聴覚活用の効果が少ない者が多い可能性がある。

・高等部本科生徒と同様、人工内耳装用生徒であったとしても、その聴覚活用や言語発達の程度に応じて、読話、手話や指文字、キューサイン等、多様な手段を利用することが必要である。

・高等部本科生徒と同様、聴能学的には、人工内耳では閾値の下降に伴い、「音への気づき」が良くなっており、これは、傾聴態度の良さに反映されていると思われる。「音への気づき」に比して

言語音の聞き取りや言語力、コミュニケーション面、学習面では伸び悩んでいる事例が多い。このことは、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する人工内耳を装用している聴覚障害生徒の大きな課題であるといえる。言語音の聞き取りについては、個人差、人工内耳手術前の言語獲得環境、人工内耳の装用時期および装用後の丁寧な言語指導が重要であり、これらはコミュニケーション面や学習面に影響を及ぼすことから、基本的には高等部専攻科の課題というより、早期発見後の乳幼児期からの療育・教育の課題であるともいえる。

・高等部本科生徒と同様、特別支援学校（聴覚障害）における生活面・行動面では比較的適応が良い。このことは、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する人工内耳を装用する聴覚障害生徒にとって、特別支援学校（聴覚障害）のコミュニケーションに配慮した教育環境（手話や指文字、筆談の使用等）に適応できていることを示していると考えられる。